

第71回 大阪府青少年読書感想文コンクール

小学校高学年の部 特選

寝屋川市立三井小6年 藤野朋花（ふじの・ともか）さん

◇見えていなかったもの

「もう二十二時やん。ここまでしか出来んかった。一日二十四時間じゃ足りひん。」時計の秒針の音が、私を不安にさせる。目の前の日めくりカレンダーには大きな字で、「受験まであと一五〇日」と書かれている。私は焦りを感じていた。去年なら、また明日やればいいやと思っていたのに、今年は、一日一日が去年とは比べ物にならないほど貴重に思える。私の頭の中は、「合格しなきゃ意味が無い」という、恐怖でいっぱいだった。そんな時、ALSという、今はまだ治療法のない難病と闘う、竹永先生の物語に会った。

「いつかALSになってしまふかも知れない」そんな絶望の中にいた先生に希望を灯したのは、偶然立ち寄ったホールで聞いた、日明小学校の合唱部の歌声だった。病気の恐怖から竹永先生を救った歌声って、どんなものだったのだろう。その思いに駆り立てられ、本を読み終えた私は、すぐに「日明小合唱部」と検索した。流れてきた歌声は、まるで歌が生きているかのような力強さと温かさで溢れていた。竹永先生とみんなの想いが、歌と共に一気に流れ込んできた。コンクールに向けて、どれだけの努力をしてきたんだろう。緊張やプレッシャーを乗り越え、仲間と先生の想いを一つにして歌う姿に、私は強く心を揺さぶられた。それは、美しい歌声だけではなく、毎日を懸命に積み重ね、目標に向かって進んできた過程そのものが、歌を通して輝いていたからだ。これが、竹永先生が感じた希望なのかもしれない。

私は今、受験という大きな壁の前に立っている。模試の結果が良くても、合格は保証されない。失敗したら、これまでの努力が無駄になってしまう気がしてとても怖い。バツがついた解答用紙は、努力を否定されたようだった。でも、本当は逆なんだ。努力は無駄ではない。なぜなら、合唱部のみんなは結果に関係なく、全力でやり切った自分達を誇りに思い、達成感に満ちていたからだ。日々の不断の努力こそが私を成長させる、かけがえのないものだったのだ。「合格だけが全てではない」と心から思えた瞬間だった。受験のプレッシャーに追われ、ただ時間を「消費した」としか考えられていなかった自分。その見落としていたものに、やっと気づくことができた。受験の壁は、目標への階段に変わった。

命は限りがあるからこそ、日々を輝かせる意味がある。毎日を「消費した」のか「全うした」のかは自分の心次第だ。結果がどうであっても、私も受験を最後までやり抜いたということを、誇りにできるよう努力し続けたいと思った。だから、毎日を輝かすための一歩として、受験にも全力で向かおうと思う。

もう、私の前に焦りはない。これから先に、自分を成長させるどんな挑戦が待っているのか、ワクワクする気持ちで溢れている。そして、限りある時間の中で、自分がどう生きたいのかを問い合わせ続け、毎日を輝かせていきたい。どんな未来も、私次第だから。

（「とびたて！みんなのドラゴン」オザワ部長／岩崎書店）